

新

歌人群像

稲森宗太郎

●ルパシカの夢

●来嶋靖生●



跳び立つ螳螂

水枕うれしくもあるか耳の下に氷のか
けら音たてて遊ぶ

三重県名張市の中心部、市立図書館のある
小高い丘の上に、この歌が彫られた自然石の
歌碑が建っている。碑の周りには幾本もの山
桜があり、花どきには美しい風情をみせる。
碑の文字は稲森宗太郎。死の四日前に書かれ
た、いわば絶筆である。

稲森宗太郎は一九〇一（明治三十四）年七
月十二日、三重県名賀郡名張町（現・名張市）
本町に生まれた。本町は名張町の中心から南
西にのびる古い町並みで、商家が多く、旧初
瀬街道筋にあたり、昔は伊勢参宮往來の客で
賑わったという。現在、その町並みは、道路
が舗装されたり、新しい建物が建ったりして
多少の変化はあるが、随所に往時の面影を残
している。

稲森家は米穀商であったが、明治維新後、
煙草の専売制が布かれてからは煙草の元売捌
商となった。父は惣兵衛、母はいさ、稲森家
の跡取り息子として宗太郎は父母の愛を一身
に受けて育った。幼時から痩せ型で小さく、

かまきりのようだとわれ、かまきりが愛称となつた。のち、自ら「石郷亭」「蟻郷亭」と号したのも、その思い出による。

宗太郎は小学校を卒えると津市に出て、三重県立一中(現・津高校)に進学した。秀才の誉れ高く、四年まで首席を続けたという。文学への目覚めは早く、中学三年の時に「中学世界」の巖谷小波選の俳句欄に「山門の赤椿奥の院の白椿」が一等に当選、また四、五年頃は「短歌雑誌」に投稿、与謝野晶子、石川啄木、若山牧水らの選にししばし入選している。やがて文学仲間もでき、同じ寄宿舎にいた同期の中谷太郎、岩津資雄、太郎の親戚で先輩の中谷孝雄らと同人誌「自画像」をはじめた。

一九二一(大正十)年、中学を卒業した宗太郎は、第一早稲田高等学院経済学科に入学する。父の意向に従つて経済学科を選んだが、入学後はあり余る才をほしほしに、さまざまなことを手がける。西条八十の門を敲いて詩を学び、島村民蔵の演劇研究会に参加し、窪田空穂を訪れて本格的に短歌を作り始める。初期の短歌は次に見るようによく素直で平明なものである。

茶碗と煙管とこがりて日のさせり衰へて這ふ冬の蠅ひとつ

一方、小説相互批評の「水曜会」もはじめた。仲間は都筑省吾、染谷進、小沼達らの四人で、その小説は「身のまはりのことを、素手で、言葉少なに、飽つけないくらゐ平易に、随筆風に書いた」(都筑省吾)ものであつた。

また山岳部に入つて槍ヶ岳、甲武信ヶ岳など著名な山を次々に踏破する。「山は一万尺テントを張れば、星のランプに手ごとどく」という九節から成る早稲田「山岳部登山歌」は、稲森宗太郎の作詞として「学友会雑誌」(一九二四(大正十三)年三月)に掲載されている。アメリカ民謡に詩をつけたもので、現在は京大・西堀栄三郎作詞「アルプス一万尺」として普及しているが、同時期、同形のものが各校で歌われていたのであろう。

これより先、宗太郎は中谷孝雄を介してある女性と知り合った。同人誌「自画像」の作品を読んで、すっかり宗太郎に憧れたという京都精華高女出身の前田美津子である。二人の交友はふかまり、ともに東京で生活するようになる。やがて、宗太郎は中谷孝雄、梶井基次郎、外村繁らがはじめる同人誌「青空」に誘われ、その創刊号(一九二五(大正十四)



ルパンカを着た宗太郎

年一月)に「蠅蠅子」の名で短歌十一首を發表する。梶井基次郎の「檸檬」が掲載されたのもその号である。二首を引く。

庭くまのこごれる雪に眼をやりぬなごまぬ心人におさへつつ
わが上にねがふべき言葉妹と植うる萩のにひ芽の上に願ふも

ここにある「妹」が新妻の美津子で、生活も病状もままならぬ身を愁いととも、妻へのやさしい心遣いを見せている。美津子は色白の美人で、宗太郎のわがままをあたたく包む、従順な女性であつた。

だが、東京と京都はやはり遠い。創刊号だけで、宗太郎と「青空」との縁は自然消滅となつてしまつた。

稲森宗太郎

写実・幻想・感覚

一九二六（大正十五）年二月、窪田空穂を囲む学生たちの間で新しい雑誌をはじめよう、という声があがった。空穂邸の門脇に一本、槻（けやき）の若木がある。たまたま改造社から空穂の自選歌集『槻の木』が出たばかりであった。仲間の集まりで「あれをいただこう」と宗太郎が提案し、雑誌「槻の木」創刊の運びとなった。空穂をはじめ、五十嵐力、山口剛、会津八一、西条八十らの教授たちが応援し、尾崎一雄、丹羽文雄、浅見淵ら小説志望の学生たちも次々に執筆した。宗太郎は、都筑省吾、山崎剛平らとともにつねにその中心にあった。

中学5年生の頃の宗太郎。
右は、三高生の中谷孝雄



一九二八（昭和三）年、大学を卒業、卒業論文は「『新古今集』の研究」であった。卒業はしたものの職はない。「勤め口さがしまではりて疲れしを笑はむ心今をわきくる」といった歌を詠んでいる。作品はこの年あたりから目覚ましい成長を見せる。

道の上のわが影法師ほのかにも帽子かむれりこの春の夜を

わが妻が今日のゼリーに浮かせたる苺を食へば春の味のする

灯をけして眠らむとすればさよ更けを

蚊帳のべに来て鳴くも馬追

原稿紙の綴り目の糊よむ我にかすかなる音をたてて離るる

土の上に吹き落されてまろき目を闇にひらきてありし芋虫

右の帽子の歌に見るような幻想性、苺のゼリーのもつモダンな感性、馬追や原稿用紙の歌に見る繊細な感覚、いずれも新しい。また芋虫の歌は、八首の連作だが、のちに尾崎一雄が注目し、「芋虫の『まろき眼』が稲森に見えてくる」と激賞している。自然主義の流れに立つ空穂に学んだ宗太郎であるが、伝統を消化し、時代を先取りする新鮮な響きが感じられる。時にはユーモアを交えた歌もある。

青くして角の尖れる我の鬼檻にし入れて久しくも見ぬ

定家も西行も、渋つ面して歌よみしなり。しづつ面して歌をよみなむ、生涯を我も

さらに思想的にも敏感で、右翼のテロに倒れた労働党代議士山本宣治を悼み、こう詠んでいる。

赤旗に巻かれし死骸街をゆき逢ふ学生に帽を取らしむ

右の幾つかの歌で知られるように、宗太郎にはきらめくような才気があった。若さのもつ気取りもあつたかもしれない。流行の先端を行くルバシカなどを着て得意になる、そんな愛すべき一面もあつた。だからルバシカを着込んで名張の生家に帰ったりすると、「赤化学生」ではないかと疑われ、特高警察が尾行してきて近所の噂になった、という話もある。

雪溪の寒鮎

ところで、多くの若ものがそうであったように、宗太郎の体も結核菌に侵される。当初、肺炎カタルと診断されたが、病巣はしだいに広がり、最後は喉頭結核になる。咳が続き、

前列左が宗太郎、右は染谷進、
後列左は窪田空穂、右は都筑省吾



声が出なくなるという状態であった。

肌ぬげるわが胸の上に聴診器しづかに
うごき遊べる如し

聴診器胸にうけつつカーテンのひだに
たまれる灯かげを見てをり

しかも悪いことに、親友の小沼達が同じ肺
結核で一九二八（昭和三）年八月に死去する。
少なからぬ衝撃があったと思われる。

友よわが枕べに、おもしろき話したま
へ、さらば我れ紙にかきて、はははは
と笑はむ。

友が見舞いに行くとき、この歌を書いた紙が
壁に張ってあった。「これは、稲森宗太郎が、
私に最後に見せた笑いであった」と、都筑省
吾は書く。宗太郎は省吾に伴われて病院へ行
く。

道に拾ひのるタクシーの座に床に緋桃
のつぼみちらばりてゐる

いたはられ歩みて来ればうす青き花も
つ蘭を人道に売る

病床の宗太郎のもとへ水枕が届く。「初め
てせる水枕を喜びて、十一日によめるもの」
の詞書のもとに九首の歌を宗太郎は詠む。冒
頭に記した歌をはじめ、一首ずつを赤い罫の
入った便箋に毛筆で書いた。筆に乱れはない。
まさに死力を尽くして記したのであろう。

水枕に頭うづめつつアルプスの雪溪の
中にひとりわがゐる

水まくらつめたきなかに目をあげば寒
鮎と我は生れ変りゐる

水枕に眠りしわれは谷川のふとさすか
んぼむさぼり食ひぬ

枕べに白き小虫のまひ入りぬ外の面は
春の夕べなるべし

心は澄み、冴え、のびのびと詠んでいる。

銜いも自負もない、大きな自然の中に、この
若き才能は還つて行く。一九三〇（昭和五）
年四月十五日、妻の美津子と父に看取られて
宗太郎は世を去った。享年三十。戒名は
国学院院院祝宗泉居士。

宗太郎の作品は、仲間たちによってひそかに
愛され語り伝えられてきたが、死後約五十
年を経た一九七九年、旧友尾崎一雄が「水枕」
の歌について「海」に書き、それを読んだ山
本健吉が「毎日新聞」で讃え、さらに岡井隆
も「中部日本新聞」に書いた。筑摩書房の
『現代短歌全集』にも収録された。郷里名張
市では顕彰の機運が高まり、歌碑が建立され、
毎年宗太郎を偲ぶ集まりが開かれている。

大正末年から昭和の初めにかけて、新感覚
派の台頭、プロレタリア文学の興隆をはじめ、
文学の世界にはさまざまな潮流が渦巻いてい
た。宗太郎も当然、それらの波をかぶりつつ
自らの文体を模索していたに違いない。早稲
田に学び「槻の木」を原点到、さらに広い文
学に生きようとした宗太郎であった。その限
りない可能性は、惜しくも病魔のため中断さ
れたが、あと何十年かの命を神がこの才能に
与えていたら、と思わずにはいられない。

（きじま・やすお「槻の木」編集代表）